幼児の対人葛藤場面における問題解決方略に関する発達的研究

馬場　恵里香 *・牧　正興 **

A Developmental Study on Problem Conflict Solving Strategies in Infant Interpersonal Conflict Situations

Erika BABA and Seikou MAKI

概　要

本研究は、保育実践現場における対人葛藤場面での年少児・年中児・年長児が使用する問題解決方略の特性を分析、検討することを目的とした。予備調査として幼児を対象に撮影し記録を行ったところ、カメラを気にせず対人葛藤場面に影響を与えないことが確認できたため、本調査ではハンディカメラでの記録・撮影を行った。その結果、一つの対人葛藤場面において複数の問題解決方略を使用しており、年少児は泣きによる解決方略、言語的主張解決方略、攻撃的・報復的解決方略を、年中児は言語的主張解決方略、攻撃的・報復的解決方略を、年長児は言語的主張解決方略、協調的解決方略を高い割合で使用していることが明らかとなった。

加えてその内容を年齢ごとに比較・検討すると、年齢によって方略使用の流れや使用している状態などが異なっていることが示された。

【問題】

多くの幼児は保育所や幼稚園に入園し、初めて集団生活を経験する。園での生活の中ではそれまで過ごしていた両親やきょうだいとは異なる仲間同士の関係が出現する。しかし仲間とともに遊び、それを展開させていく時には自他との調整が必要であるため、自分と年齢の近い仲間と一緒に遊ぶことは容易ではなく、多くの対人葛藤場面に直面することとなる（鈴木・子安・安2004，高濱1995）。

この対人葛藤については、「個人の欲求・目標・期待が他者によって妨害されているものと個人が知覚する時に生じる対人的過程であり、感情・認知・行為を含むもの」（山本1996）、「個人行動、感情、思考の過程が他者に妨害されている状態」（益子2015）、「一方の子どもＡが他方の子どもＢに言語的、行動的に影響を与えるときＢが抵抗をＡがその行動の維持を示すという２者間の明らかな対立状態」（井上・尾形・片岡2015）などの定義がなされている。また幼児の対人葛藤場面については、いざこざ・トラブル・けんかなどの用語を用いて多くの研究がなされているが、それぞれの用語についての定義は曖昧であり明確な一致した見解がないことも指摘されている（山本1999）。

本研究では山本（1999）にならい、対人葛藤をいざこざ・トラブル・けんかを包括するものとして「個人の欲求や目標、感情による行動が他者によって妨害されていると個人が知覚している状態」と定義する。

対人葛藤場面について山本（1996）は年少児・年中児・年長児を対象に幼児の対人葛藤の発生原因と対人関係について検討をおこなった結果、自己中心的な行動から、集団的に適応した行動を獲得してくことが明らかになった。また、中川・山崎（2004）は幼児の対人葛藤が遊びに与える影響について、対人葛藤は必ずしも当事者の幼児にネガティブな影響を与えるのではなく、友だちとの絆を強める上で重要な役割を担っていると述べている。さらに山本（1999）は、対人葛藤は幼児にとって社会的・認知的発達や言語取得が促され、社会的関係の中で他者を理解する能力を獲得したり、自分の意志を表現する方略を学習したりする重要な契機となることを明らかにしている。これら一連の研究より、幼児にとって対人葛藤を経験することは他児を理解し社会性を身につけていくためにも大きな課題であることが伺える。

対人葛藤が発生し、解決していく過程の中で使用される相手を納得させるための具体的な手立てを「方略」とし、幼児の対人葛藤場面における解決方略については、当事者同士の遊びの関わり方によって「優先権主張」や「独占権主張」など使用する方略に相違が見られることが報告されている（倉持1992）。山本（1995）は、年少児・年中児・年長児を対象に遊具を用いた同年齢の仲間との遊び場面において問題解決方略がどのように発達し

* 認定こども園愛の泉こどもの園
** 久留米大学人間健康学部子ども総合学科

変化するのかを検討し、非言語的で自己中心的な「自己主張方略」から説明や協調などの「言語的方略」へと変化していることを明らかにしている。また、年少児・年中児・年長児の社会的認知と社会的問題解決方略に関して発達的に検討した研究では、年少児は非言語的な「泣き解決方略」や「攻撃・報復的解決方略」、「他者依存解決方略」が多く、年中児と年長児は言語を用いた「言語的主張解決方略」が多くなっていることを明らかにしている。

さらに、年長児は自分にとってネガティブな状況であっても直接相手に主張せず逃避・回避・無視といった「消極的解決方略」を多くおこなっていることも明らかにしている。これらの研究から、当事者同士の関係や年齢によって対人葛藤を解決するために使用する方略が異なることが示されている（山本1999）。その意味でも対人葛藤場面に保育者がいつ、どのような時期に介入をおこなうかは実際の保育場面では幼児の社会性の発達上、大きな課題となる。

以上のことより本研究では、実際の保育現場を観察・記録し年少児・年中児・年長児が対人葛藤発生時に使用する問題解決方略について各年齢ごとに分析し、各方略の使用頻度やその内容について年齢によって違いはあるのかを検討したい。

【目的】

保育実践現場で、年少児・年中児・年長児の対人葛藤場面における問題解決方略について、その特性を分析、検討する。

【方法】

１．調査対象

Ｓ県内の認定こども園に通う園児計210名。内訳は、年少児68名（３クラス 男児35名、女児33名）、年中児70名（３クラス 男児34名、女児36名）、年長児72名（３クラス 男児37名、女児35名）。

２．実施日時

2016年８月下旬～10月中旬。１回の観察・記録は午前９時～午前11時、午後１時～午後３時までの計４時間。年少児、年中児、年長児、計21回。

３．場所

年少児・年中児・年長児の各保育室を中心とし、その他園庭や遊戯室など園児の生活の場。

４．手続き

１）予備調査による記録方法の検討

2016年７月上旬～８月中旬。対人葛藤が生じた際に、ハンディカメラ及び、固定カメラを設置しての撮影を行い検討した。固定カメラの撮影ではより正確な場面撮影が困難であった。一方ハンディカメラでの撮影ではよりリアルな場面を捉えることができ、かつ幼児がカメラを気にすることはなく、その状況に影響を与えないことが確認できたためハンディカメラでの撮影を行うこととした。

２）観察内容及び方法

同年齢の幼児２名以上が関わり合っている場面を対象に対人葛藤が生じるのを待ち記録した。山本（1996）にならい、ある子どもが他の子どもに対してネガティブ（攻撃や強い自己主張、にらみ等）な言動をとった場合を事例開始とした。対人葛藤発生後、保育者が介入した時点でそれを事例終結とし、保育者の介入がない場合には幼児の当事者の一方が立ち去ったりどちらかが謝ったり、その他解決したと見なされる発話や行動が出された時に事例終結とした。撮影記録をするにあたり事前に対象児となる園児の保護者に研究の主旨等を説明し了承を得た。

３）観察で得られた事例についてのチェックリストの作成、及び分析方法

山本（1996）をもとに問題解決方略についてのチェックリストを作成した。問題解決方略については、①泣きによる解決方略：泣く行動、②攻撃的・報復的解決方略：叩く、押す、蹴る、噛むなどの身体的な攻撃行動や、やり返す物を奪い返すなどの身体的な報復行動、③保育者介入解決方略：保育者を呼び、助けを求めるなどして解決しようとする行動、④言語的主張解決方略：言語的手段を用いて自己の意思を相手に主張する行動、⑤威嚇的解決方略：相手をにらみつける威嚇的行動、⑥消極的解決方略：状況の回避や逃避、相手の主張を無視する行動、⑦協調的解決方略：許可や提案、譲歩する行動の７つのチェック項目である。

対人葛藤場面において何の方略が使用されているかを検討するため、チェックリストをもとに観察者を含めた３名で各事例の評定をおこなった。各事例の一致率は94～75％であった。

対人葛藤状況の分析は詫摩ら（1965）が行った実験の結果をもとに、葛藤の度合いが大きい程、その継続時間が長くなることが確認されていることから、本研究で得られた観察の事例についても、使用されている各方略の継続時間についても分析をおこなった。

【結果】

各年齢における対人葛藤場面で使用された方略について

年少児、年中児、年長児それぞれの対人葛藤場面を観察した結果、得られた事例数は年少児９事例、年中児９事例、年長児７事例であった。

年少児、年中児、年長児が使用した問題解決方略について Table １－１、Table １－２、Table １－３に示す。

Table １－１．年少児の使用した問題解決方略決方略

事例番号	泣きによる解決	攻撃・報復的解決	保護者介入解決	言語的主張解決	威嚇的解決	消極的解決	協調的解決
1	△	△	－	△	－	△	－
2	○	△	－	－	－	○	－
3	△	△	△	△	△	－	－
4	○	△	－	○	－	◎	△
5	△	○	－	－	－	－	－
6	△	○	－	△	△	－	－
7	△	－	△	◎	△	－	－
8	－	－	－	◎	－	◎	－
9	－	△	△	○	－	－	－

注：◎は１分以上、○は30秒～１分、△は30秒以下、－は使用無し

Table １－２．年中児の使用した問題解決方略決方略

事例番号	泣きによる解決	攻撃・報復的解決	保護者介入解決	言語的主張解決	威嚇的解決	消極的解決	協調的解決
1	－	△	－	○	－	－	△
2	－	－	－	○	△	－	－
3	－	△	－	△	△	－	－
4	－	△	△	◎	－	－	△
5	－	△	△	◎	△	－	－
6	－	△	－	◎	－	－	△
7	－	△	－	△	－	△	－
8	－	－	△	◎	－	－	△
9	－	◎	－	○	－	△	－

注：◎は１分以上、○は30秒～１分、△は30秒以下、－は使用無し

Table １－３．年長児の使用した問題解決方略決方略

事例番号	泣きによる解決	攻撃・報復的解決	保護者介入解決	言語的主張解決	威嚇的解決	消極的解決	協調的解決
1	－	－	－	○	－	－	△
2	－	－	－	△	○	○	△
3	○	○	－	◎	△	◎	△
4	－	－	－	◎	－	－	◎
5	－	△	－	△	－	－	－
6	－	△	－	△	－	－	－
7	－	△	－	◎	○	－	◎

注：◎は１分以上、○は30秒～１分、△は30秒以下、－は使用無し

Table. ２　方略ごとの使用回数

年齢	泣きによる解決	攻撃・報復的解決	保護者介入解決	言語的主張解決	威嚇的解決	消極的解決	協調的解決
年少児	7回	7回	3回	7回	3回	4回	1回
年中児	0回	7回	3回	9回	3回	2回	4回
年長児	1回	5回	0回	7回	3回	2回	5回

幼児は、一つの対人葛藤場面において複数の方略を使用していることが明らかとなった。

年少児は、泣きによる解決方略67％、攻撃的・報復的解決方略78％、保育者介入解決方略33％、言語的主張解決方略78％、威嚇的解決方略33％、消極的解決方略44％、協調的解決方略11％使用していた。

年中児は、泣きによる解決方略0％、攻撃的・報復的解決方略78％、保育者介入解決方略を33％、言語的主張解決方略を100％、威嚇的解決方略を33％、消極的解決方略を22％、協調的解決方略44％使用していた。

年長児は、泣きによる解決方略14％、攻撃的・報復的解決方略57％、保育者介入解決方略０％使、言語的主張

解決方略100％、威嚇的解決方略43％、消極的解決方略29％、協調的解決方略71％使用していた（Table2）

≪年少児≫の事例内容について

観察で得られた、年少児の事例１～事例９についての要約と継続時間を示す。

事例１（年少児）
継続時間：37.53秒

段ボールでできたトンネルの中に女児Ａと女児Ｂが同時に入ろうとしている。Ｂが先に進む。ＡもＢの後ろから慌てながら進み、４段ボールの中に入る。Ｂが先にトンネルから出て、後ろからＡが出てくる。出てきた直後にＡとＢが入る順番を巡って口論になる。

事例２（年少児）
継続時間：46.07秒

保育室の中で、座っていた女児Ｃと走っていた男児Ｄがぶつかり、Ｃが泣く。Ｄは小さな声で謝るがＣは泣き続ける。Ｄはうなだれた様子で床に座り込む。ＣはＤの方を向きながら泣き続けＤはじっと床を見つめている。そこに保育者が来て、ＣとＤに声をかける。

事例３（年少児）
継続時間：52.03秒

園庭での遊びを終え、保育室に戻ってきた男児Ｅの首や背中を男児Ｆが押したり、叩いたりする。Ｅが泣きながら、Ｆを蹴り返す。ＦはＥをにらむ。その後Ｅが保育者を呼びＦに叩かれたことを話し、保育者と一緒にＦの元へ行く。

事例４（年少児）
継続時間：１分15.23秒

保育室で女児４名と男児１名がままごと遊びをおこなっている。

女児Ｇが椅子を持ち、女児Ｈの背後とロッカーの間を通り抜けようとするがＨとロッカーの間に挟まり身動きが取れなくなってしまう。ＧはＨに通らせてほしいと頼むが、Ｈはその場から動こうとしない。Ｇが泣き出す。一緒にままごとをしている男児Ｉと女児Ｊ、ＫがＧとＨに声をかけるがＧとＨは動かない。Ｇが体を押しながら入り込みＨの後ろを通り抜けるとＨが泣き出す。そこに保育者が来てＨに声をかける。

事例５（年少児）
継続時間：42.27秒

保育者の片付けの合図に気付き、Ｊが片付けの合図に気付き、ブロックを片付け始める。その周りを男児Ｋがくるくると回っている。ＫがＪの肩に手を３回ぶつけ、その後走って逃げる。ＫがＪを追いかけＫの洋服を引っ張り床に抑えこむ。Ｋがその動きに抵抗し、Ｊが泣き始める。そこへ保育者が近づきＫに声をかけた。

事例６（年少児）
継続時間：37.37秒

朝の挨拶や出席確認をするため集まっていると、男児Ｌと男児Ｍが椅子の取り合いを始め、体を掴み合ったり叩き合ったりして自分が使う椅子だと主張し合っている。そこに保育者が来て声をかけた。

事例７（年少児）
継続時間：１分44.43秒

女児Ｎと女児Ｏの２名が絵を描いている。ＮとＯの間で女児Ｐが塗り絵をもったまま、その様子を見ている。女児Ｎが女児ＯにＯが使用している色鉛筆を貸して欲しいと声をかけたが、Ｏがそれを断り、Ｎと口論になる。その様子を戸惑いながらＰが見ている。

事例８（年少児）
継続時間：２分26.53秒

女児ＮとＯが仲直りし、歌い始めた。女児Ｐがその様子を見ながら、ＮとＯと一緒に歌い始めた

直後Ｎの腕にＰが持っていた塗り絵の角が当たり、Ｎが怒る。Ｐは慌てて謝罪するが、Ｎは許さないと言い、Ｐと口論になる。

事例９（年少児）
継続時間：１分31.17秒

保育室で男児Ｑ、男児Ｒ、女児Ｓがそれぞれ積み木遊びを行っている。その近くで女児ＴとＵが２人で一緒に積み木遊びをしている。ＱがＴとＵの使用している積み木を取り、自分の後ろに隠す。それに気づいたＴとＵがＱに怒る。その後ＱがＳの積み木を壊し、Ｓ、Ｔ、Ｕとトラブルになる。

≪年中児≫の事例内容について

観察で得られた、年少児の事例１～事例９についての要約と継続時間を示す。

事例１（年中児）
継続時間：55.70秒

女児ＡとＢと男児Ｃ、男児Ｄのグループと女児Ｅと女児Ｆのグループが近くの場所でままごと遊びをしている。その周りでかばんを背負ったままの男児Ｇが動きながら様子を見ている。

Ａが使用しているフライパンなどを貸して欲しいとＥが話すが、貸してもらえず、口論になる。その後Ｇが来てＢが使用している鍋を取ろうとし、取り合いになる。

事例２（年中児）
継続時間：39.10秒

男児Ｈ、男児Ｉ男児Ｊ、男児Ｋがトランプで神経衰弱

をして遊んでいる。男児Ｌがやって来て近くに立ち、Ｈ達の様子を見ている。Ｈがトランプを数字が見えないよう裏向きにしたまま机の上に並べる。それをＬが触り、表向きにして机に置こうとする。それを見て、Ｈ達がＬに怒る。そこに女児Ｍが来てＨが並べたトランプをかき集め片付けようとし、ＭとＨが口論になる。

事例３（年中児）
継続時間：22.80秒
　女児Ｎの腕についている黄色のゴムを見て、男児Ｏが自分の物だと主張し取ろうとする。Ｎも自分のものだと主張するが、Ｏは納得せずＮの腕からゴムを取ろうとする。

事例４（年中児）
継続時間：１分32.50秒
　男児Ｈ達が２回目の神経衰弱を行っている。同じ数字の記されたトランプをＨとＩが一緒に見つけその後、そのトランプがどちらのものなのか主張し合い口論になる。

事例５（年中児）
継続時間：１分54.10秒
　男児Ｐ、男児Ｑ、男児Ｒが３人で虫探しをしている。
　Ｐが虫を見つけ、Ｑに渡す。ＲがＱとＰに怒る。Ｒが砂をＱに向かって砂を投げる真似をし、ＰがＱをかばう。ＰがＲの肩を掴む。Ｒが座り込み砂を拾う。Ｐが座り込んでいるＲの頭を叩いて逃げる。Ｒが立ち上がり、ＰとＱの背後から向かって砂を投げる。Ｐが振り向き砂を握りしめてＲを追いかけ砂を投げようとする。Ｒが泣き始め保育者がＲのもとに来た。

事例６（年中児）
継続時間：１分57.07秒
　おやつを食べる時間になり、男児Ｓと男児Ｔがランチルームに行き隣に座る。Ｓが配られた牛乳箱を指で弾きながら遊び始める。ＳがＴを誘い、倒したら負けというゲームを始める。ゲームをしながら勝敗をめぐり口論になる。ＴがＳがおやつを見ている隙にＴの牛乳箱を倒す。ＳがＴの頬を叩く。

事例７（年中児）
継続時間：18.38秒
　朝の出席確認の時間にＵが保育者の近くに座った後、その真後ろにＶが座った。ＶがＵの前に身を乗り出そうとし、ＵがＶに後ろから押して前に来ないでと口論になっている。その様子に保育者が気付きＵとＶに声をかけた。

事例８（年中児）
継続時間：１分36.38秒
　女児Ｗと女児Ｘ、女児Ｙがままごと遊びをしている。ＷとＸがままごとの役をめぐって口論になったり、その後に来た女児Ｚがままごとに入れて欲しいと声をかけるがなかなか入れてもらえず口論になったりしている。

事例９（年中児）
継続時間：２分18.13秒
　Ａ′が園庭でロケット発射ごっこをしているところにＢ′が来て突然Ａ′に対して戦いごっこを始め、段々と蹴るなどの行為が激しくなっていく。その後Ａ′がその場から離れる。

≪年長児≫の事例内容について
　観察で得られた、年少児の事例１～事例９についての詳細の内容と要約、継続時間を示す。まず初めに事例２と事例３について詳細の内容を記す。
事例１（年長児）
継続時間：１分26.63秒
　泥団子を作るために女児Ａが土をスコップで集めている。女児Ｂ、Ｃ、Ｄ、ＥはＡが集め終わり合図するのを待っている。Ａが合図をした後、５人で一斉に砂を取るがその分量について口論になる。

事例２（年長児）
継続時間：２分21.44秒
　女児Ｆ達が机の上でかるたをしている。ＧとＨがその様子を見てかるたに加わる。Ｆは「私読みながら取る」と読むと同時に絵のついたかるたも取る。Ｆがとろうとするが何回もＧとＨに取られ、Ｆがにらみながら怒り始める。ＦがＪに自分がもっていたかるたを渡し、再び読み始める。Ｇはかるたを取る時にＦの方をちらちらと見ている。その様子をみてＩが仲介する。

事例３（年長児）
継続時間：２分55.30秒
　男児Ｌが５名の友達と一緒にレゴブロックで宇宙船と宇宙ステーションと家を作り進めていた。しばらくして、保育者の掛け声を聞き片付け始める。ＬとＮが明日も続きが出来るようにと棚の上に置く準備を始める。そこに、時々Ｌ達の周りをうろうろとしていたＯがＬ達に近づきＬが作っていた宇宙船を引っ張り壊す。Ｌが手を振り程そうとするが、Ｏは壊し続ける。Ｍもその様子を見て、壊さないように叫ぶ。ＬがＯに叩いたりブロックを投げたりする。ＯがＬを叩き返す。しばらくしてＯがその場を離れＬはその場に座り込み泣き始め、その様子に気付きた保育者が近づき声をかける。

事例４（年長児）
継続時間：２分44.27秒
　女児Ｐが自宅から持ってきた塗り絵を塗ろうと女児

Ｐ、Ｑ、Ｒ、Ｓで塗り絵をする順番を決めているところに女児Ｔが入ってきた。その後、５人で塗る順番だけでなく、塗りたい場所の絵を手で押さえながら塗る場所も決めようとするがなかなか決まらず、しばらく話し合いをしている。

事例５（年長児）
継続時間：31.47秒
男児４名、女児６名が保育室に飾っている自分で制作したハロウィンの飾りを見上げたり、ジャンプをして触ろうとしたりしている。女児Ｕが「あれとって」と声をかけ、その飾りに向かって男児Ｖがジャンプした直後に飾りが取れてしまう。周りに誰が取ったのかと責められＶが座り込んだところに保育者が来て声をかけた。

事例６（年長児）
継続時間：22.90秒
女児Ｗと隣に座っていた男児Ｘがレゴブロックで犬を作ろうと組み立てていた。そこに男児Ｙが加わった直後、ＹがＷのブロックを取り上げ、口論になる。

事例７（年長児）
継続時間：４分51.59秒
女児Ａ′が女児Ｂ′にシンデレラの紙芝居の読み聞かせを行おうとしている。女児Ｃ′はその横に座り自宅から持ってきた本を読んでいる。男児Ｄ′が女児Ａ′の隣にやって来てＡ′に読み方が間違っていることなどを指摘し、Ｂ′やＣ′を巻き込みながら口論になる。

【考察】

保育実践現場において対人葛藤場面の観察・記録を行ったところ、幼児は一つ対人葛藤場面において複数の問題解決方略を使用していることが明らかとなった。

これは山本（1999）が実際の対人葛藤場面においては単数ではなく複数の方略を並行して用いられている可能性があると述べていることと同様の結果であった。

幼児は、対人葛藤を生起した当事者同士の親密性（山本1995）や関わり方、遊びの内容（倉持1992）などの状況によって複数の方略を並行して使用したり、変化させながら使用したりしていると考えられる。

年少児の問題解決方略の使用について

年少児は、泣きによる解決方略や攻撃的・報復的解決方略、言語的主張解決方略が使用された割合が一番高かった。言語主張的解決方略によって対人葛藤を起こし合っている相手に対し、自己の意思や欲求などを伝えようとするが、まだ言語を媒介しての主張が通らない場合が多く（山本1996）その時には泣きによる解決方略や攻撃的・報復的主張を使用することが増えることが予測される。また、言語で一方的に相手が説明したり主張したりしていることが理解できず困った時には事例７のように、消極的解決方略が使用される割合が高くなると考えられる。事例３や事例５のように一方の幼児がふざけ合うつもりで行った非言語的な叩く・突くなどの行為がそれを受けた幼児にとって理解できないものとなり、泣いたり報復的行動を行ったりして、対人葛藤に発展することも多いことから山本（1999）が示すように年少児での言語的なコミュニケーションの未熟さが泣きによる解決方略や攻撃的・報復的方略に関係していることが伺える。

泣きによる解決方略では事例２や事例４のように保育者の方を向きながら泣き、保育者が側に来ると泣き止む姿や事例５や事例７のように相手の行動が止まるまで泣く姿が見られた。これは相手とのやり取りでは解決できないと感じた場合には泣くことで保育者に知らせ、相手の行為を止めようとしていると考えられる。その時には、その行為を受けている幼児はどのように接してよいのか分からず、相手から目線を逸らすなどして消極的解決方略を用いるのではないだろうか。保育者介入解決方略を使用する際には、泣きによる解決と同様に相手の行為が止まらなく続く場合や自分の主張が通らなかった場合には保育者を呼び解決を求めると予測される。

威嚇的解決方略を使用する時には言語的主張解決方略と同時に使用されることが多いが、事例３にように叩く・蹴るなどの行為をされた後に１度立ち止まり相手が気付くまでにらみ続けるという様子も見られた。このことからも言語を媒介しての主張が通らなかった場合や言語での主張を行うことができなかった場合には威嚇的解決方略で相手への怒りなどを表情で伝えようとしていると考えられる。

協調的解決方略は11％と７つの方略の中で使用された割合が一番低かった。事例４でも対人葛藤を起こしている当事者ではなく、その場で一緒におままごと遊びを行っていた幼児が解決方法を提案している。年少児ではParten（1932）が明らかにしているように並行遊びが多く見られ、自分の遊びを続けていくために自己の主張や欲求を通そうとすることから協調的解決方略があまり見られなかったと予測できる。

年中児の問題解決方略使用について

年中児は７つの方略の中で100％と一番高い割合で言語主張的解決方略を使用している。９事例中、８事例が対人葛藤発生時には言語を媒介しての主張を行っている。これは山本（1996）が年中児では同年齢間に対しては最も言語主張的解決方略を使用すると述べていることと一致している。言語で主張した後に自己の主張が通らない場合や言葉のやり取りが続かず相手の意図が理解できない場合にはその後に攻撃的・報復的解決方略や威嚇的解決方略の使用に繋がることが多いと予測できる。また言語主張的方略使用後に29％消極的方略を使用している。事例７のように一方的に勢いよく言語で主張してい

る時や、事例９のように言語で相手の行為の制止をしても止まらない時には、無視やその場から立ち去るなど消極的な行動をすることが考えられる。

次いで攻撃的・報復的解決方略が78％と高い割合で使用されていた。事例１や事例５、事例７のように言語主張的方略と同時に使用することや事例３のように言語主張的方略使用後に用いることが多かった。また事例９では一方の幼児が戦いごっこをしているつもりになって突然叩く・蹴るなどしている。それに相手が怒り、報復的な行動をし、トラブルに発展している。自己の主張が通らず、言語的な主張のみでの解決が困難だと感じた場合や相手の行為が止まらず、自他の対立状況において自己防御が必要な場合（東・野辺地1992）には攻撃的な行動に出ることが示されているのではないだろうか。

協調的解決が44％使用されていた。Parten（1932）が年中児では、連合遊びが多くみられることを明らかにしていることから、遊びを通して他者との関わりが増えたことにより事例６や事例８のように表情や言語的な主張から相手との状況を読み謝罪や提案などを行うと考えられる。

威嚇的解決方略は33％使用されている。年少児の威嚇的解決方略使用時と同様に言語主張方略時に用いていることが多い。このことからも、言語的な主張を行っても相手に伝わらない場合には威嚇的方略を用いて表情で伝わるようにしていることが伺える。

保育者介入解決方略は33％の割合で使用されていた。事例４や事例８のように実際には保育者を呼びに行かなくとも、「先生に言う」と相手に伝えることで、相手の行為を止めようとしていると考えられる。

泣きによる解決方略の使用が見られなかった。その要因として、本調査では、幼児が自然に対人葛藤を起こす場面を待って記録したため、全ての対人葛藤場面を記録することが出来なかったことが挙げられる。

年長児の問題解決方略使用について

年長児は７つの方略の中で、言語主張的解決方略を100％使用していた。観察で得られた７つの事例全てにおいてどの事例でも対人葛藤生起後、始めに言語的な主張を使用しており、また一方的に自己主張をするのではなくではなく、相手と応答的に主張し合う姿が多く見られた。これらの行動から、年長児は対人葛藤発生時に自分の意思の伝達手段として言語を用い対応することや相手との言い合いの中で相手の行動を規制したり変化させたりするために言語的主張方略を高い割合で使用している（山本1995）ことを示唆していると考えられる。

次いで協調的解決方略使用の割合が71％と高かった。事例１や事例４、事例７では対人葛藤状況を発生させている当事者が自己主張をし合った後、相手の主張を受けて話し合いを行ったり、お互いが納得できるような提案をしたりする姿が見られた。年長児になると協同的遊びや連合遊びが増える（Parten1932）ことからも遊びを通して他者との関わりが多くなる。これにより、自己の主張を行いながらも、相手の表情や言語的な主張などから相手との状況を理解し、協調的解決方略を使用していることが予測される。

攻撃的・報復的解決方略の使用の割合は57％であった。事例３や事例７で見られたように言語主張的解決方略や協調的解決方略を使用しても相手の行為が止まらなかった場合には攻撃的・報復的解決方略を使用しているのと考えられる。

威嚇的解決方略は43％の割合で使用されていた。威嚇的解決方略を使用している全ての事例は言語主張的解決方略と同時に使用されていた。言語での主張だけでなく、にらむなどの行為を同時に行うことで表情などから、相手へさらに自分の感情を表しているものと思われる。

消極的解決方略は22％の割合で使用していた。事例２や事例３で見られるように相手が言語主張的解決方略や威嚇的解決方略を用いて自己主張を行っているのを見たり、聞いたりした後に無視や目線を逸らすなどの行為を行っている。相手が主張していることを理解していても納得できない時や自分の意思を貫き通す時には消極的解決方略を使用することが伺える。

泣きによる解決方略は14％の割合で使用されている。事例３では、対人葛藤発生後、直後には泣きによる解決方略を使用していない。言語的主張解決方略相手の使用後も相手行動が止まらず攻撃的・報復的解決方略を用いて止めようとしている。しかし、その後も相手の行動が止まらず、自分が制作した遊具が壊されていくことへの悔しさや怒りにより泣きによる解決方略を使用したと考えられる。

幼児は対人葛藤が生起した状況や相手との関係から様々な方略を並行して使用したり、変化させながら使用したりしていることが明らかとなった。年少児・年中児・年長児の各方略の使用されている割合を比較すると言語的主張解決方略や攻撃的・報復的解決方略など大きな差がないものもあった。しかし、その内容を比較すると、年齢によって方略使用の流れや使用している状態などが大きく異なっていた。各年齢の言語の発達によるコミュニケーションの違い（山本1999）や相手との親密性（1995）、遊びの状況（倉持1992）などに合わせて方略を使用していることから、方略の分類上は同じであってもその内容については年齢によって変化していることが伺える。これらのことからも対人葛藤場面に保育者がいつ、どのような介入をおこなうかは実際の保育場面では幼児の社会性の発達上、大きな課題となる。今後は、対人葛藤場面における保育者の介入を行うタイミングとその内容について明らかにしたい。

【引用・参考文献】

鈴木亜由美・子安増生・安寧（2004）幼児期における他者の意図理解と社会的問題解決能力の発達：「心の理論」との関

連から　発達心理学研究，15，292－301
高濱裕子（1995）自己主張タイプ児の遊びをめぐる交渉の発達　発達心理学研究，6，155－163
山本愛子（1996）遊び集団内における幼児の対人葛藤と対人関係に関する研究―対人葛藤発生原因および解決方略と子ども同士の関係―幼年教育研究年報，18，77－85
益子洋人（2015）青年期の発達段階と葛藤経験が統合的葛藤解決スキルに及ぼす影響　北海道教育大学紀要　教育科学編，65，3－43
井上沙央里・尾形明子・片岡基明（2015）幼児の対人葛藤場面における加害行為の意図性が介入謝罪に及ぼす影響　広島大学心理学研究，15，129－145
中川美和・山崎晃（2004）幼児の対人葛藤が遊びに与える影響　幼年教育年報26，61-67
山本愛子（1995）幼児の自己調整能力に関する発達的研究―幼児の自己調整能力に関する発達的研究―教育心理学研究，43，42－51
丸山（山本）愛子（1999）対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達的研究　教育心理学研究，47，451－461
倉持清美（1992）幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ―いざこざで使用される方略と子ども同士の関係　発達心理学研究，3，1－8
東敦子・野辺地正之（1992）幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究―けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス―教育心理学研究　40，64－72
小林真（1993）幼児の対人葛藤場面における社会的コンピテンスの研究―人形を用いた実演反応と言語反応による測定―教育心理学研究　41，70－77
MildredB. Parten (1932) Social participation among pre-school children. *Jornal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269
（渡辺弥生・伊藤順子・杉村信一郎（編）（2008）原著で学ぶ社会性の発達　ナカニシヤ出版　p.178－181）